國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

複合助詞とメタ言語表現：「について」「に関して」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北澤, 尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000914

「御～あり」・「御～候ふ」の尊敬形式としての発達度の違い
―「～せ・させたまふ」との対照から―

林田明子

一　本稿の目的

覚一本平家物語（高野本・『新日本古典文学大系』本文に拠る）に、次のような尊敬表現が見られる。

(1)主上なのめならず御歎ありけり。〈頼豪、上、一五四・一六〉

(2)かやうの事共に、御悩はつかせ給ひて、遂に御かくれありけるとぞ聞えし。〈小督、上、三三八・三〉

このような「御～あり」の形式（以下、「御～あり」と呼ぶ）については、次の二点が指摘されている。

・鎌倉時代以降新しく加わり、室町時代に盛んに行われた形式である（金田弘　一九八一：一六九頁、柳田征司　一九八五：二〇五頁）。

・「御～あり」は極めて高い敬意の表現である（桜井光昭　一九七一：二四五頁、金田弘　一九八一：一六九頁）。

これらの指摘から、「御～あり」が盛んに用いられるのは、中世後期以降であるものの、中世前期には尊敬形式の一つとして発達しつつあったこと、高い敬意を表す尊敬形式であること、の二点がわかる。

一方で、覚一本平家物語には、尊敬語補助動詞「たまふ」に尊敬の助動詞「す」「さす」を重ねることで、「～たまふ」よりも高い敬意を表す「～せ・させたまふ」の例も見られる。

(3)一人は、普賢寺殿の北の政所にならせ給ふ。〈吾身栄花、上、一六・二〉

(4)御門（＝二条上皇）かくれさせ給ては、……。〈清水寺炎上、上、三五・三〉

このように、覚一本平家物語においては、(1)、(2)のような「御～あり」の例と、(3)、(4)のような「～せ・させたまふ」の例とが、極めて高い敬意の表現という共通点を持って共存しているのである。しかし、両形式の間にどのような差異があるのかについては、これまで十分に論じられてきたとは言いがたい。

そこで、本稿では以下の二点を明らかにする。

1「御～あり」と「～せ・させたまふ」との差異がどこにあるのかについて明らかにする。[1]その上で、「御～あり」が、中世前期に敬語表現として加わったとされるにもかかわらず、なぜ中世後期に至るまで「盛んに行われ」なかったのかについて考察を行う。

2加えて、「御～あり」の「あり」を丁寧語にした形式、「御～候ふ」についても調査する。「御～あり」と「御～候ふ」とは、丁寧語の有無を除いて、ほぼ同質のものと考えられてきたが、そのように考えて問題がないのであろうか。「御～あり」・「～せ・させたまふ」の対照をきっかけとして、この点についても明らかにしていきたい。

なお引用文中の（　）は補足説明を、〈　〉は巻名、新日本古典文学大系の頁数と行数を示すために筆者が付したものである。

二「御～あり」と「～せ・させたまふ」

まず、「御～あり」と「～せ・させたまふ」との間に予想される差異をまとめると、大きく次の二点に分けられる。

①介在・上接する語が漢語か和語かという差。
②敬意の対象となる人物の身分差。

では、実際に①②のような差異は見られるのか、以下で述べていくことにする。

二・一　「御～あり」と「～せ・させたまふ」に介在・上接する語

まず、①の視点から「御～あり」と「～せ・させたまふ」を見てみる。「御～あり」には、「御参詣あり」や「御懐妊あり」のように、漢語が介在したものが多く、その数は、堀畑正臣（二〇一〇）によれば、「御～あり」全体の八割にのぼる。この点で、文体差という側面は、少なからず認められる。しかし、それだけでは説明できないのも事実である。両形式に介在・上接する語には、次のように共通するものがある。

(5)（高倉上皇ハ）かやうの事共に、御悩はつかせ給ひて、遂に御かくれありけるとぞ聞えし。〈小督、上、三三八・二〉

(6)又後二条関白殿、御ぐしのきはに悪御瘡出でさせ給て、うち臥させ給ひしが、同廿七日、御年卅八にて、遂にかくれさせ給ぬ。〈立願、上、五五・一四〉

(7)丹波少将（＝成経）、そなたの風もさすがなつかしうや思はれけむ、或時兼康を召して、「是より大納言殿の御渡あんなる、備前の有木の別所へはいか程の道ぞ」と問ひ給へば、〈阿古屋之松、上、一〇九・八〉

(8)（高倉）宮は高倉を北へ、近衛を東へ、賀茂河をわたらせ給て、如意山げいらせおはします。〈競、上、二二〇・四〉

(5)、(6)は、「隠る」、(7)、(8)は、「渡る」がそれぞれに用いられている。これと同じように、「御～あり」と「～せ・させたまふ」の両方で使用されている語をまとめると次のようになる。

参り　渡り②　出で　上り　とどまり　隠れ　忘れ
許し　くだり　誓ひ　歎き

このように、「御～あり」に介在する語と、「～せ・させたまふ」に上接する語には、共通する語が見られる。この点で両形式はある程度の共通性があると考えられ、漢語か和語かという文体的な観点からだけでは、両形式の違いを説明できない。

では、次に②の観点から比べてみる。「御～あり」と「～せ・させたまふ」の敬意の対象に違いが見られるかどうかという観点である。会話文では、統一的な敬度の測定が難しいため、ここでは地の文に限って考察を行う。その上で、「～せ・させたまふ」と「御～あり」との敬意の対象を比較すると、次のように、両形式の敬意の対象には、共通のものが多く見られる。

帝・上皇

(9)（高倉上皇ハ）かやうの事共に、御悩はつかせ給ひて、遂に御かくれありけるとぞ聞えし。〈小督、上、三三八・二〉

(10)御門（＝村上）、御琵琶をさしおかせ給ひて、「抑汝はいかなるものぞ。いづくより来れるぞ」と御尋ねあれば、〈青山之沙汰、下、五四・七～八〉

関白

(11)関白殿（＝藤原基房）ちから及ばせたまはず、御涙をおさへて御退出あり。〈葵前、上、三三〇・六～七〉

后

(12)大宮（＝太皇太后宮）かく（＝入内の宣旨が下ったこと）ときこしめされけるより、御涙に沈ませおはします。「……」とぞ、御歎ありける。〈二代后、上、三一・一〇〉

(13)（太皇太后宮ハ）さきのきさいの宮にて、幽かなる御ありさまにてわたらせ給しが、永暦のころほひは、御年廿二三にもやならせ給けむ、御さかりもすこし過ぎさせおはしますほどなり。〈二代后、上、三〇・一〇〉

⑼、⑽、⑾はいずれも、同一人物に対して一連の文脈で「御～あり」と「～せ・させたまふ」とが使用された例である。⑼は上皇、⑽は帝、⑾は関白への敬意である。また、⑿、⒀では、文脈的には比較的離れているものの、同一巻の地の文で、同一の后に対して「御～あり」と「～せ・させたまふ」が使用されている。以上の事実からは、次の二点が指摘できる。

一点目は、両形式が一連の文脈で使用されている事である。敬意差があるならば、両形式が一連の文脈において使用される事は考えにくい。二点目は、両形式が、帝・后・関白といった非常に高い身分の人物に使用されている事である。敬意差があるならば、両形式の敬意の対象の上限も、異なる蓋然性が高い。したがって、両形式における敬意の対象の身分の上限には、大きな違いがないと考えられる。

以上のように、両形式の共起語、敬意の対象を比較したところ、両形式には共通点が多く見られ、両形式が一連の文脈で連続して使用された例も見られる。したがって、単純に和語か漢語かという違い、敬意の度合いの違いであると結論付ける事はできない。

では、両形式の違いはどこにあるのだろうか。

二・二　「御～あり」と「～せ・させたまふ」の活用形

この問題を考えていくにあたって、重要な鍵を握っていると思われるのが、両形式の活用形である。それぞれの活用形ごとの例数を挙げる。

【表二】

	未然	連用	終止	連体	已然	**命令**	合計
御～あり		七八	二一	二二	八	**一**	一三〇
～せ・させたまふ	五六	三二六	一〇六	七四	三九	**四五**	六四六

【表二】からは、「御～あり」に未然形の例が見られない点、命令形の例数が一例しか見られないという点で「～せ・させたまふ」との間に大きな開きが見られる事に注目される。では、これらの事実は何を意味するのだろうか。以下で考えていく。

二・三　「御～あり」と「～せ・させたまふ」の命令形の機能

前掲の【表一】で注目した二つの事実のうち、本稿では、「御～あり」に一例のみ見られる命令形と、「～せ・させたまふ」の命令形とに注目する。その理由は以下のようなものである。堀畑正臣（二〇一〇）では、「御～あり」が尊敬形式として一体化[3]していると認定する基準を、次のように規定している。

それら（筆者注：「御～あり」）が増加してもすぐ動詞的な働きをするわけではない。これらが会話表現で「当為表現」や「依頼・命令表現」になった時に「御～あり」全体が動詞として機能する。（六八三頁）

以上の理由から、堀畑正臣（二〇一〇）では、中古の「御～あり」を「動詞的な働き」、つまり、尊敬形式として一体化しているとは認めていない。会話表現において「当為表現」・「依頼・命令表現」になることを、「御～あり」の尊敬形式としての発達の基準とするこの指摘自体は、合理的であるように思われる。たとえば、次の例は、中世後期に成立した天草版平家物語の例であるが、前述のように、この時代には尊敬形式「御～あり」が盛んに使用されたことが指摘されている。

⑭（右馬允→喜一）「……あらあら略してお語りあれ。」
〈天草版平家物語 巻一、三頁〉

⑭は会話文であり、話し手の右馬允は、聞き手の喜一に対して依頼を行っている。そして、この場合の「御～あり」は、「あなたが語るという事態があってほしい」と考えるのは不自然であり、「お語りください」という「依頼・命令表現」として解釈するのが自然である。よって、「依頼・命令表現」になっているかどうかを尊敬形式として一体化したかどうかの基準とする事には意義がある。

しかし、「当為表現」・「依頼・命令表現」の認定基準が厳密に規定されているかどうかが問題である。堀畑正臣（二〇一〇）において、「当為表現」・「命令・依頼表現」は、文脈の中で、その文がどのような機能を有しているかとい

う点ではなく、むしろ、どのような助動詞を下接するか、どのような活用形をとるか、という形式上の観点から機械的に設定されているように見える。なぜなら、命令形の例はすべて「命令・依頼表現」に繰み込まれているからである。[4] しかし、命令形による表現は、決して「命令・依頼表現」だけではない。そこで、命令形による表現をより詳しく観察してみる必要があると思われる。

「御～あり」と「～せ・させたまふ」の命令形による表現には、聞き手がいる場合といない場合とがある。聞き手がいる場合を「行為要求」、いない場合を「希求」として、「御～あり」・「～せ・させたまふ」それぞれの例数を示すと、次の【表二】のようになる。

【表二】

	行為要求	希求
御～あり		一
～せ・させたまふ	四三	二

それぞれの例を、次に挙げる。

⒂（壱岐判官朝康→後白河法皇）「義仲おこの者で候。只今朝敵になり候なんず。急ぎ追討せさせ給へ」と申ければ、〈鼓判官、下、一〇二・八〉

⒃（重盛ハ）金銭九十九文、皇子の御枕におき、「……御命は方士東方朔が齢をたもち、御心には天照大神入れかはらせ給へ」とて、〈御産、上、一四八・九〉

⒂は、義仲に嘲弄された朝康が、後白河法皇に義仲追討を進言する場面であり、「行為要求」の例と考えられる。それに対して⒃は、誕生したばかりの皇子が立派な天子になるように祈る場面であり、「希求」の例である。一方、「御～あり」の命令形「御～あれ」の唯一の例は、「希求」の例である。

⒄此御娘后にたたせ給ひしかば、入道相国夫婦共に、あはれいかにもして、皇子御誕生あれかし、位につけ奉り、外祖父、外祖母とあふがれんとぞねがはれける。〈大塔建立、上、一五一・六〉

これは、清盛夫妻が皇子の誕生を望む場面での心内文である。形式上は、「御～あれ」と、命令形にはなっている。しかし、心内文であることから、「なんとかして皇子がご誕生になりなさい」のような「行為要求」を表しているとは考えにくい。したがって、ここでは、「なんとかして皇子の御誕生という事態があってほしい」のように、「希求」の例と解釈するのが穏当であろう。したがって、尊敬形式として一体化を果たした「御～あり」の確例とは認められないのである。

以上のことから、次の二点が指摘できる。

一つ目は、「～せ・させたまふ」は命令形による「行為要求」を表せるという点で、「御～あり」とは表現領域が異なる点である。

二つ目は、「行為要求」の例が見られないということは、「御～あり」に「依頼・命令表現」の確例が見られないことを示していることである。尊敬形式としての一体化を果たしていれば、「依頼・命令表現」の例が現れてもおかしくないので、覚一本平家物語における「御～あり」が尊敬形式として一体化を果たしていたとは考えにくい。

このように、機能差の面から検討を加えた結果、覚一本平家物語の「御～あり」は、尊敬形式としての一体化を果たしていなかったと考えられるのである。

二・四　本節のまとめ

本節では、「御～あり」と「～せ・させたまふ」との差異について調査・考察を行った。その結果、介在・上接語が漢語か和語かという違いでは説明できず、また敬意差とも考えがたいことを述べた。では、両形式の差異はどこにあるのかというと、命令形の機能差が挙げられる。「行為要求」も「希求」も表しうる「～せ・させたまふ」に対して、「御～あり」は「希求」しか表さない。したがって、「御～あり」は尊敬形式としての一体化を果たしていなかったと考えられる。

三　「御～あり」の丁寧語形式について

「御～あり」が尊敬形式として未発達なものであったとすると、確認しておかなければならないのは「御～候ふ」

である。従来、「御～あり」の「あり」の部分を「候ふ」に転換したものが「御～候ふ」であるとされてきた。そこで、「御～候ふ」についても「御～あり」と同様の調査を行ってみる。

三・一　「御～候ふ」の活用形

まず、「御～候ふ」の活用形ごとの例数を【表三】で確認してみる。【表三】には、参考として「御～あり」の例数も挙げてある。

【表三】

	未然	連用	終止	連体	已然	命令	合計
御～あり		七八	二一	二二	八	一	一三〇
御～候ふ	四	九	一〇	一三	一	一三	五一

これを見ると、「御～あり」の活用形が揃っておらず、命令形の例が一例しか見られないのに対して、「御～候ふ」は、活用形が揃っており、命令形も一三例あることがわかる。では、「御～あり」に見られた機能の不十分さは、「御～候ふ」にも見られるのだろうか。以下で確認する。

三・二　「御～候ふ」の命令形の機能

「御～あり」の命令形には「行為要求」の例は見られなかったが、「御～候ふ」には、命令形による「行為要求」の例が見られる。

⑱（大納言成親→清盛）大納言、「まッたくさる事候はず。人の讒言にてぞ候らむ。よく〳〵御尋ね候へ」と申されければ、〈小教訓、上、八二・一〉

⑲（斎藤別当実守→宗盛）「……故郷へは錦を着て帰れといふ事の候。錦の直垂、御ゆるし候へ」と申ければ、〈願書、下、二六・七〉

⑱は聞き手として清盛、⑲は宗盛が存在し、それぞれ「尋ねる」「出る」という動作の実現が求められている。このように、「御～候ふ」の命令形「御～候へ」は、「行為要求」の機能を有していると言える。

次の【表四】は、「御～候ふ」の命令形を「行為要求」

と「希求」とに分け、例数を示したものである。

【表四】

行為要求	希求	合計
一三		一三

先に確認した通り、「御～あり」の唯一の命令形、「御誕生あれかし」は、「希求」であり、「行為要求」の例は見られなかった。一方、「御～候ふ」には、「行為要求」と言える命令形が一三例存在することから、「御～候ふ」は「御～あり」よりも、尊敬形式として一体化していると考えられる。なお、「希求」の例がないのは、「候ふ」が丁寧語であるためと考えられる。丁寧語が聞き手への敬意を表す以上、聞き手がいないことを要件とする「希求」の例が見られないのは、当然のことである。

三・三　「御～候ふ」が行為要求の機能をもつ理由

「御～あり」においては命令形「御～あれ」の機能に欠落があり、その欠けた領域を「～せ・させたまふ」の命令形「～せ・させたまへ」が担っていた。それに対して、「御～候ふ」の命令形「御～候へ」には、行為要求の例が見られる。それはなぜだろうか。

その理由を探るために、「～せ・させたまふ」に「候ふ」を加えた「～せ・させたまひ候ふ」を見てみる。次の【表五】は、その活用形ごとの例数を一覧にしたものである。

【表五】

未然	連用	終止	連体	已然	命令	合計
二	一〇	二	二	三		一九

これを見ると「～せ・させたまひ候ふ」の命令形は見られないことがわかる。このことから、命令形「～せ・させたまひ候へ」という形式が存在しないために、その領域を命令形「御～候へ」が担っていたと考えられる。

三・四　本節のまとめ

「御～候ふ」には、「御～あり」とは異なり、行為要求の例が見られる。したがって、命令形の機能という点から見

ると「御～候ふ」は「御～あり」よりも先に尊敬形式として発達していたと考えられる。

四　なぜ「～せ・させたまひ候へ」ではなく「御～候へ」なのか

三節における考察からは、次のような疑問が浮かび上がる。それは、なぜ「御～あり」よりも「御～候ふ」が先に尊敬形式として一体化を果たしたのかという点である。この点に関しては、次の二つの理由が考えられる。

一つ目の理由は、中古において、「～たまひはべり」のような「尊敬語＋丁寧語」のような承接例がほぼ見られなかったということにある。この制約は中世以降弱まっていくとされるが、やはり中世前期の段階では、尊敬語に丁寧語は下接させにくかったと考えられる。このことは、「御～あり」と「～せ・させたまふ」との例数を比較した【表六】、「御～候ふ」と「～せ・させたまひ候ふ」とを比較した【表七】を対照することによって明らかになる。

【表六】

	未然	連用	終止	連体	已然	命令	合計
御～あり		七八	二一	二二	八	一	一三〇
～せ・させたまふ	五六	三二六	一〇六	七四	三九	四五	六四六

【表七】

	未然	連用	終止	連体	已然	命令	合計
御～候ふ	四	九	一〇	一三	一	一三	五〇
せ・させたまひ候ふ	二	一〇	二	二	三		一九

ここで注目したいのは、それぞれの例数の総和である。「御～あり」の例数は「～せ・させたまふ」の五分の一程度しか見られない。それに対して「御～候ふ」は「～せ・させたまひ候ふ」の三倍近くの例数が見られる。この例数の差は、相互承接の制約が中世前期に至っても影響を残していることを示している。つまり、「～せ・させたまひ候ふ」という「尊敬語＋丁寧語」の形式よりも、常体の「あり」を丁寧語にした「御～候ふ」の方が用いられやすかったと考えられるのである。言い換えれば、「～せ・させたまひ

候ふ」という言い方が困難であったために、いわば消極的に「御～あり」が選択されたという事である。

二つ目の理由は、「行為要求」の表現においては、聞き手に対して一層の待遇的配慮が求められるためだと考えられる。中古においては、前述のように「尊敬語＋丁寧語」という承接がほぼ見られず、中世前期に至っても、その例数はあまり多くない。そのような状況下で、「尊敬語＋丁寧語」の機能を持った「御～候ふ」が出現すると、身分の高い人物への行為要求には、行為の為手としての相手への敬意と合わせて、聞き手としての相手への敬意を表せる「御～候ふ」が使用されることになるのだと思われる。これが、「御～候ふ」が先に尊敬形式として一体化した積極的な理由である。

以上で見てきたように、「御～あり」と「御～候ふ」とは、尊敬形式と、それに丁寧語を加えた形式という単純な関係ではなく、尊敬形式としての発達のしかたが異なるものと考えられる。つまり、丁寧語が加わった「御～候ふ」が先に尊敬形式として発達し、それを追うかたちで、「御～あり」の尊敬形式として発達が進んだと考えられるのである。

五　本稿の結論

本稿では次の二点を明らかにした。

1「御～あり」と「～せ・させたまふ」とは、介在・上接する語が漢語か和語かという違いのみでは説明できず、敬意差とも考えがたい。両形式の差異の一つとして、命令形の機能差が挙げられる。「行為要求」も「希求」も表しうる「～せ・させたまふ」に対して、「御～あり」は「希求」しか表さない。このことにおいて、「御～あり」は、尊敬形式として未発達であったと考えられる。このように、中世前期における「御～あり」が尊敬形式として未発達であり、その機能に制限があったと考えれば、中世後期に至るまで、盛んに用いられることがない理由も理解される。一つの形式でより広い表現領域を持つ「～せ・させたまふ」の方が使用しやすいからである。

2「御～候ふ」には、「御～あり」とは異なり、命令形による行為要求の例が見られる。したがって、命

令形の機能という点から見ると「御～候ふ」は「御～あり」よりも先に尊敬形式として発達していたと考えられる。その理由の一つは、中古における敬語の相互承接の制約の影響で、中世前期に至っても「～せ・させたまひ候ふ」という形式が使用しにくかったためであり、もう一つの理由は「御～候ふ」という形式の登場によって、行為要求の際に、聞き手への一層の配慮を表現できるようになったためだと考えられる。

以上の事から、「御～あり」と「御～候ふ」との関係は、尊敬形式とそれに丁寧語を加えたものという単純なものではなく、先に「御～候ふ」が発達し、それに引きずられる形で「御～あり」も尊敬形式化したと考えられる。

本稿では、共時的な分析をもとに、丁寧語の有無が尊敬形式化の順番に影響を与えたという可能性を指摘した。このような事例は、管見の限り、従来の研究には見られないものであるが、重要な観点であると考える。

今回は、特に命令形の機能を中心に論じてきたが、未然形の有無など、触れられなかった点も多い。また今回は、共時的な分析をもとに通時的変化の要因を考える事に主眼があり、実際に「御～あり」が尊敬形式化していくという、通時的変化の過程についても、ほとんど触れられていない。これらについては今後の課題としたい。

注

（1）「御～あり」のうち、対象とするのは、和語動詞連用形・漢語動名詞が介在したもののみである。

（2）「わたらせ給ふ」の形式では、移動の意味を表すもののみを対象をする。

（3）この「御～あり」という形式は「接頭辞＋名詞もしくは動詞連用形＋あり」という、語の連続から、最終的に「御～あり」全体で一つのものと捉えられる尊敬形式へと変化を遂げたと考えられる。この、「一つのものと捉えられるようになった」段階を、本稿では「尊敬形式として一体化」した段階と捉える。また、一体化を果たしておらず、変化の過程にある状態においては、「尊敬形式としての発達の度合い」を問題にする。

（4）なお、当為表現の認定基準も助動詞「べし」を下接しているかどうかということのようである。

参考文献

・桜井光昭（一九七一）「近代の敬語Ⅰ」『講座国語史5 敬語史』大修館書店

・金田弘（一九八一）「中古中世と現代敬語」『講座日本語学9 敬語史』明治書院

・柳田征司（一九八五）『国語学叢書⑤ 室町時代の国語』東京堂出版

・堀畑正臣（二〇一〇）「『覚一本平家物語』に於ける「御（ご／おん／ぎょ／み）～あり」をめぐって」『古典語研究の焦点』武蔵野書院